

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

性文化と身体

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5177

性文化と身体

須藤健一

はじめに

オセアニアの伝統社会では、イレズミ、癍痕文身、割礼などの身体変工が、身体装飾としてひろくおこなわれてきた。ポリネシアのマルケサスやニュージールランドのマオリの人びとが、顔面から脚部にいたる全身に、精巧な紋様を彫りこんだ姿は、一八〇一九世紀にそこを訪れた西欧人を驚愕させ、多くの記録に残されている。このような身体装飾は、男らしさ・女らしさの美的表現であるとともに、勇敢さ、一族の象徴、地位・身分差の文化的表象として意味づけられていた。ミクロネシアのカロリンの島社会でも今世紀初頭まで、多様な身体装飾が、単に美の表象としてだけでなく性文化と深くかかわり、おこなわれていた。

ミクロネシアのポーンペイ、チューク（トラック）、中央カロリンの各社会では、イレズミだけでなく女性の性器

拡張や男性の睾丸摘出などがおこなわれてきた。そして、思春期の男女の自由な性行動が認められている。チューク社会では、男性は一八〜三〇歳のあいだ生産活動に従事する責任を免れる年齢階梯に属し、戦士としてと同時に性的行動に励み、その分野で名声を得ることに高い価値がおかれていた。いっぽう、女性も処女性は何ら問題にされず、未婚の母やその子どもが社会的に差別されたり、偏見をもつてあつかわれたりすることもない。また、結婚後においても婚外性交の規制と違反者への制裁はあるものの、男性だけでなく女性も配偶者以外の異性と「秘密裏に」性関係をもつことに情熱をもやす。このように、性におおらかで、性行動へのエネルギーの消費を奨励する信念と態度は、カロリン社会に共通する伝統である。

それになりたいし、ニューギニア高地社会では男性が「けがれた存在」である女性と交わることや精液の放出は「生氣」を失うとみなし、性行動を抑制する。いっぽう、メラネシアのマヌス社会では性行動を恥とし、夫婦でさえも性交は義務的行為で、妻にとっては苦痛でしかないと考えられている。このように、オセアニアにかぎってみても「性肯定社会」、「性抑制社会」と「性否定社会」^{*1}とがみられる。

本章では性肯定社会の典型例として、カロリン社会をとりあげ、人びとの性になりたいする知識とその身体的表現、性にまつわる禁忌とそれが適用される人間関係を中心に述べてみたい。性肯定社会とはいえ、この社会でも社会的文脈で数多くの性的禁忌が課せられている。その多くは異性のキョウダイ間にとくに規定されている。そして、他者の異性キョウダイの性的ことがらや性行動を口にすることは極力慎まなければならない。性にまつわる言動がもとで殺傷事件に発展することもある。

身体変工による性的興奮の促進

イレズミ

ミクロネシア社会は、身体のだの部位に施すかの差異はあるが、思春期前後からイレズミをおこなう習慣があった。パラオでは女性が、一二〜一三歳ころから手指や手首にイレズミをはじめ、「一人前の女」になると腕や足へとその範囲を広げていった。ポーンペイの男性は胸部と四肢、女性は四肢と腰部にイレズミをするが、背面にはおこなわなかった[★]。それにはたいし、ヤップ、中央カロリン、チュークでは、男性が上腕部、下腹部、四肢のほか背面、そして女性が大腿部から尻にかけて全面にイレズミを施すのを特徴としていた。女性のなかには、性器の上部の下腹部に逆三角形ないし円内に三角形の紋様を刻むものもいた。これは、女陰を象徴していた。それを除けば、イレズミは単純な幾何学紋様が一般的で、男性はイルカやカメなどの形や、日本統治時代には日の丸を彫りこむものもあつた。中央カロリンのサタワル社会では、女性は思春期のころから手の甲などにイレズミを施し、結婚後も上腿部への彫りこみを続けた。上腿部のイレズミを、男性の前で露出させることは性関係をもつとき以外には許されず、腰布で覆い隠さなければならぬ。とくに、異性のキョウダイにその部分を見せることは、インセストと同様に厳しいタブーである。

性器変工

中央カロリン諸島からポーンペイ社会で注目されるのは、女性が性器に変工をくわえる点である。サタワルの人びとの性器に対する解剖学的知識によると、女性性器は六つの部分からなり、性器全体はティギーとよばれる。上部のふくらみがポラヌ、小陰唇がフィル、尿道がファイチュチュン（黒い石）、陰腔がパガラワン、陰核がクメレルウン、

陰腔にある筒状の肉突起がアヌウ（「神」とそれぞれ区別され、そのうち性交にもっとも重要な役割をはたすのは、小陰唇と陰核であると考えられている。そのために、小陰唇を拡張・伸展させる技法が発達している。

小陰唇は花卉にたとえられ、その二枚のひだを伸展変工することで男性の性的興奮を昂揚させると考えられていた。この変工は、思春期のころからおこなわれ、結婚後も夫などの手をかりて続けられたという。現在でもサタワル社会の七〇歳以上の女性は若いころにこの変工をした経験がある。その変工は小陰唇を引き伸ばして生殖器の外部にはみださせることである。そのためには海で水浴びをするときに、ある種の海藻やサンゴを生殖器にこすりつけたり、あるいは池で水浴するさいに毒性のある草や樹液をつけて小陰唇を肥大させるのである。また、蜂に刺させたり、蟻に噛ませたりもする。こうした痛みをともなう刺激をあたえるだけでなく、排尿や水浴のときにも手でひっぱりながら大きくさせる。性交中に男性が小陰唇を吸って大きくするともいわれる。いずれにせよ、女性にとっては小陰唇のひだを伸展させ、「ひらひら」の状態にすることが理想である。

ポーンペイ社会でも同様な方法で陰唇を拡張させ、なかには大きくなった陰唇の内側にイレズミを施す女性もいた。木の実や魚のうろこ状の紋様が好まれた。老人の記憶では、陰唇を拡張しない女性はそれを恥じ、男性はそれを「鼠の耳」とよんで辱めたという。いっぽう、プルワット、プルラップとチュークでも陰唇拡張の習慣がさかんである。五〇年前までは、それらの島の女性のなかには、伸ばした小陰唇に穴をあけ、ふだんは耳飾りにするココヤシ殻の飾りをつけるものもいた。彼女が歩くとからからという音が聞こえたという。そのような女性は、「性の達人」とみなされていた。

女性の性器変工の習慣にたいし男性の場合は、太くて強靱な性器をもつことを誇りとしていた。チュークやサタワル社会の男性は、男根を小石ではさみつけたり、ついたりする方法によって性器を固く、大きくしていた。ポーンペイの男性は、男根の亀頭近く、男根の下側に孔をとおし、そこにココヤシの葉軸を差し込んでいた。これは、性交時に女性の腔壁を傷つけ女性を性的に降参させるためのものであった。また、女性の歓心をかう目的で、苦痛をともな

う睾丸摘出の手術をも受けていた。この手術は成人への入社式の一環として、一六〇二歳のあいだに、森のなかの小屋で「摘出師」によっておこなわれた。摘出師は若者を横臥させ、睾丸を股間から後ろに回し、馬乗りになって、陰囊の二か所を切り込み、左の睾丸を押し出したという。切りくちが化膿すると清流で洗浄し、一〇日たつと傷面にかさぶたができて快癒する。

この手術についてスペインの宣教師は「快楽をむさぼる女性の要求がこの習慣を助長した」と述べている。^{★3}清水によると睾丸摘出は、苦痛に耐えた勇気の印しとして、ほかの男性に誇示する性格のものであり、摘出した表示として胸部に刃物で水平に長い切れめを入れたという。そのような老人が最近までいたとのことである。^{★4}胸部だけでなく、上腕部や脚部などに刃物で傷をつける身体変工は現在でもチュークや中央カロリンの男性のあいだでおこなわれている。これは男性が女性への気持ちの強さを、癍痕によって示すためである。つまり、女性への「愛」のためならいかなる苦痛にも耐える勇気があることをあらわすのである。

身体変工と性交

女性と男性のイレズミや性器変工が、実際の性的行動においてどのように価値づけられているのであろうか。サタワルやチュークの男性は、女性が性器周辺から太腿にかけてほどこしたイレズミを目にするだけでも十分な男根の高まりをみるという。そして、女性の陰唇伸展は、性交の体位にも独特の方法をうみだしている。

そのことは、性交を指す言葉の多様性からもうかがえる。サタワル語には交接をさすことば、フェのほかに性的行為を示すことばがある。たとえば、女性が「男根を口にくわえてなめる」、男性が女性の「陰腔に舌をさしこむ」、「陰唇を吸う」、「性器をなめる」（「噛む」ないし「食べる」の意味）、などである。ほかに、男性が手で女性の性器に触れる、逆に女性が男根を手淫するといった表現もある。それらの行為はいずれも交接前の予技ではなく、交接を中断しておこなったり、夫婦が性交を禁止される期間中それにかわるものとしておこなわれる。性交の禁止は妻の出産

後、子どもがことばを話せるように成長するまでの二
〜三年間、夫婦に義務づけられる。この禁忌を破ると子
どもが病気になると思われ、キリスト教に改宗する以
前（一九五三年）まで厳格に守られていた。

この地域の伝統的な性交体位には、側位と男性が男根
で女性性器を打ちながら刺激させ交接する形態の二種類
がある。側位は男女が向い合つて寝ながら抱き合い、足
をからませて男性が腰を使う方法である。これは夜、一
軒の家の中で子どもをはじめ、親夫婦、姉夫婦などがい
つしよに寝る状況で性交をおこなわなければならないと
いう住環境に適した体位である。というのは、サタワル
の家が土間形式で間仕切がないため、全家族員が一列に
頭をならべ各自のゴザの上に横たわつて寝るからである。
他の家族員に気づかれずに性交をするためには、大きな
動作をとらず、声も出さずにおこなう必要がある。もう
一つの体位の場合は、男性が座り女性が男性の方に股を
開いてあお向けに寝る。男性は手で男根を握り、それを
女性の性器、とくに伸展した小陰唇にこすりつけたり、
陰核を叩きながら刺激をくわえる方法である。この体位
では、女性の陰唇伸展が男性にとって、また男性の男根



写真1 ココヤシの葉ぶきの家の前に立つ家族。

の強靱さが女性の性的興奮を促進させるうえで重要になる。「ハンマー式」とよばれるこの動作を続けているうちに女性の性器から体液が出て音をたてるようになる。そして、女性の興奮が高まり、頂点に達した段階で、男性が男根をそう入させ射精する。この体位で女性が最高のクライマックスの状態になると、失神して尿をもらすといわれる。女性がクライマックスにいたらないのに、男性が射精してしまうのは、男性にとっては恥かしいことで、「赤ん坊のようだ」と表現される。クライマックスに達しなかった女性は、笑うことによつて相手が負けたことを示す。若い女性はこの体位をもつとも好み、男性と性の強さを競争するのである。このような性交の情景は、女性の歌にも読みこまれている。

私の芭蕉布の腰布をまくりあげよ

私のもっている大きな雨着を

恋する男と抱き合い胸に顔をうずめ

二人の顔をすりつけすりつけ

おまえの舟は私のところを行ったり来たり

小陰唇を買うためにさ

おまえの食べ物、小陰唇の端の陰毛

陰核のところを指先でいじり回し

私の腔の中でなんていい音がする

おまえが吸い回す音だろう

おまえは雨着が着たいの

私の小陰唇のたれ下げで

サタワル社会で、このような歌は女性が作詞するもので、日常生活で口ずさむことはきついタブーとなっており、祭宴やほかの島からの男性訪問者を歓待するときのみ歌われる。この歌は、祭宴の男女間での踊りや歌くらべの場面で、女性が集団で所作をつけて披露する。歌詞にある雨着は伸展した小陰唇を、舟は男根のたとえ、食べ物はその性的嘲辞、たれ下げは伸展した小陰唇をそれぞれ意味する。これは女性が拡張した性器の特徴と性の技法を歌いこんで、男性を挑発する内容になっている。

体位の多様性

サタワルではハンマー方式による性交の頻度はそれほど多くないが、トラック社会ではこれがほかの体位より優越している。性関係をもち始めた男女間では、女性が相手の性的な「強さ」を試すために好んでこの体位をとる。とくに、女性は配偶者を決めるさいに、この体位による男性の性的能力を重視するからである。しかし、婚前に性経験のない最近の新婚女性は、男性に性器を見せることを嫌う傾向が強くなってきている。いずれにせよ、男根で女性の性器を刺激する体位は、交接を射精のための行為としており、交接によって女性の興奮を高めるのではない点に特徴がある。つまり、男根で陰唇および陰核を打つことに性交の第一義的価値がおかれているからである。

カロリン社会では、側位とハンマー式の二体位のほかに、現在では男性上位や女性上位などの方法もとられている。男性上位の体位は、今世紀初頭に島に滞在したドイツのコブラ貿易商や日本統治時代に日本人によってもたらされたようである。女性上位は、フェナ・ニ・ヤップとよばれ、「ヤップ島式の交接」で、ヤップ人の好む体位をまねたといわれる。また、太平洋戦争中にマーシャル諸島へ行ったサタワルの男が、そこで経験した体位を「ヘリコプター式」と名づけて島の男たちに教えた。それは、女性上位の変形で、女性がおおむけに寝ている男性の男根の上にしやがんで性交する体位である。男性は女性性器に男根を触れるために腰をもちあげる。けれども、女性がなかなか接触させないように前後左右に動いたため、男性は腰をうかせた状態で、ちょうどヘリコプターの翼のように女性の下で向

きを変えたり、回転する破目になる。この体位を試みた男性は女性の言いなりで、負けてしまうから「恐しくて良くない」と述べていた。

いくつもある体位のうちサタワルの人がとも好み、実際におこなう体位は側位である。その体位での交集中に女性の乳房や頸部を吸ったり、噛んだりする。そして、女性はクライマックスに近づくと口を大きくあける。しかし、特定のことばによって相互に刺激しあうようなことはない。女性は極度に興奮したことを「頭がわれるようだ」と表現する。

性観念と性行動

サタワル社会で少女が初潮を経験するのは一二〜一四歳ころである。女性が「女」とみなされるのは、初潮直後におこなわれる成女式によってである。それは五日五晩月経小屋への隔離と六日目の朝の村入りの儀礼とで構成される。月経小屋へ入るとき、初潮の女性は全身にウコンの粉末を塗り、はじめて腰布をつける。村入りの儀礼は月経小屋と村の境界で女性が老女からココヤシの若葉を頭、頸、手足につけてもらい、祖霊に「良い女」になるよう呪文を唱えて祈願する内容である。この儀礼で「一人前の女」としての社会的承認をうけた少女はタロイモ田の割当てをうけ、イモを自分で栽培し、機織りなどの技術を身につけ、結婚できる身分になる。



写真2 腰巻をつけた少女。初潮後に腰布を身につける。

それになりたいし、男性の場合は少年期から成年男性への移行を示す儀礼がない。少年がココヤシの植栽、漁撈、ココヤシ縄のないかたなどの技術を修得したと判断すると、その父親は島の首長にそれを報告する。首長は男性の集会の場で若者が「島の男」の仲間入りしたことを公けにする。この報告が「一人前の男」になったことの社会的承認である。その年齢は一八、二〇歳が目安になる。

思春期の性行動

公的に成人となる以前から、若い男女の性関係は開始される。女性は初潮前から、男性は一五歳過ぎからさかんに異性ととの性関係を求める。少女が初潮前から性関係を経験したとしても咎められることはない。ある老女の話では、少女が初月経を出すには男と寝なければならぬとのことである。その相手は独身男性とはかぎらず、既婚の男、とくに姉の夫などから性的な手ほどきをうけるといわれる。

少年のなかには、一六歳ころから性に積極的になり、特定の相手と関係をもつものもいる。しかも、少年はそのことを友人に自慢げに話し、それが大人の耳にも入る。しかし、彼の両親にしろ母方のオジにしろ叱ることはなく、「気の早い子だ」というだけである。まわりの人も「ヤシ縄も作れないのに女のことしか考えない子だ」といつて彼を揶揄する程度である。子どもたちが早くに性にめざめるのは、夜間に両親の性交を目撃したり、兄たちの手助けをして若者の経験談をおしてである。また、男の子は男たちが狼談をしていたり、うわさ話をするカヌー小屋に同席して性についての知識を身につける。大人たちは子どもたちがいる前で性の話しを控えることはない。カヌー小屋は女性の立ち入りが禁じられるため、男たちははばかることなく狼談をすることができる。

思春期の男女の性行為は昼間に森でおこなわれる場合が多い。少年が弟や甥に手紙を託したり、伝言で少女に会う場所を伝える。少女は機織りやタロイモづくりの仕事を母親や姉たちと一緒にするが、その目を盗んで男に会う。便所へ行くふりをしたり、イモをかごに入れて帰る途中で水浴びをしようと行って相手の待つ場所へ行く。また、小さな

子どもを連れて森へ薪集めに出かけるときはランデブーの好機となる。二人がおち会うと、人目につかない木かげにヤシの葉を敷いて性行為におよぶ。そのあいだ男性は弟などを見張りに立たせる。若者が性関係を持つ相手は思春期の女性だけでなく、むしろ寡婦であることが多い。夫と死別あるいは離婚した三〇〜四〇歳代の女性のなかには、自分の方から少年を夜に家へ誘うものもいる。そうした女性は、性そのものを楽しみ、相手をとくに誰と限るわけでもない。他島から独身女性が訪れたりとすると、島の若者は彼女に近づこうとする。彼女が投宿している家の人も若者の性を目的とする訪問には見て見ぬふりをする。

このような若者の性行動によって、夫婦間に生まれたのではない子どもは、「藪の中の子」とよばれるが、社会的差別をうけることなく、生んだ女性の母系出自集団（クラン） 成員として正当な権利を獲得することができる。

親たちは思春期の子どもたちの性行動には干渉しないが、性関係を禁止する相手については一〇歳ころまでにはつきり教える。女の子どもには、彼女たちが表敬行動



写真3 踊りの衣裳をつけた思春期の女性。

や忌避行為をとらなければならぬ男性は誰であるかをしつかり覚えさせる。その男性と出会ったり、側を通るときには、女性は彼より一段低い姿勢をとることを義務づけられる。これはアツプウオロとよばれ、対象となる男性は実の兄弟、母系クランの同世代の男性、そして母方交差イトコおよび父方のイトコである。そして、アツプウオロをする相手との性交および結婚は禁忌である。少年は一〇歳を過ぎるころからカヌー小屋で寝泊りを始め、女性キョウグアイと同じ家に住むことを避ける。

夜這いの技法

チューク社会における思春期の男女の性行動は、ほぼサタワルのそれと同じである。五〇年前までは、男性が女性を誘い出すのに「夜ばい棒」が使用されていた。それは先端に精巧な刻みや彫刻を施した一メートルほどの棒である。男たちは昼間、気のある女性に会うと、女性に自分の棒を見せたり触れさせて、その文様の特徴をしつかり覚えてもらう。そして、夜になって人びとが寝しなくなったころ、男は好意をもつ女性の家へ向う。彼女が家のどのあたりに寝ているかを彼女から聞かなくても、島の人なら独身の娘の寝る場所はほぼ見当がつく。しのび足で目指す家に近づいた男は、娘の寝ている外側に立ち、ヤシの葉で編んだ壁のすき間から自分の夜這い棒を差し込む。棒の先端を彼女の髪にからませてから手で引っぱり、寝ている彼女に合図を送る[★]。

彼女はその棒を握って彫刻が自分の好きな相手のものであるか否かを判断し、好意をもつ男性であればその棒を強く引く。これは、親や姉夫婦たちが眠っているから家の中に入ってこいと合図である。棒を二〜三度ゆすると、外へ出てゆくからしばらく待てとのサインである。親に気づかれないように家を出るが、行く先を聞かれたら、「用足しに行く」とその場をいいのがれる。母親も年ごろの娘の結婚を望むのでそれ以上詮索しない。しかし、娘のもとへ来る男を好ましくないと思っている母親は、娘のかわりににせの合図をつたえて、誰それが「娘を盗んだ」と家の外へ出てから大声でわめく。それで、人びとの知るところとなり、名前を呼ばれた男は面目を失う。そのような「意地

の悪い」母親の仕打ちにおよばなくても、女性は彫刻が自分の好きな男性のものでないとわかると棒を押し返す。これは気持がないから立ち去れとの返事である。棒の彫刻や刻みだけでは相手が判断できない場合には、女性は低い声で「誰か」と聞き、それになりたい返事の声で、彼女は自分の恋人か否かを確かめて前述の三通りの合図をおくる。

現在、トラックやモートルロック社会の家はココヤシの葉葺きから、合板ないしコンクリート製へと変り、ルーバー式の窓をつけるようになった。家の内部を仕切つて個室を設ける間取りが一般的である。そのためによばい棒の効力は失せてしまった。しかし、若者は夜に恋人を呼び出す方法をいろいろ工夫している。その一つは注射器で、金網を張つた窓越しに、水を恋人の顔に直射する。ただし、ねらいを定めて一気に押さないと、水が分散し側に寝ている人にもかかり失敗の度合が大きい。

性的表現の禁忌

サタワル社会では異性キョウグアイ間に表敬行動や忌避行為などの多くの規範がある。そのなかでも、性に関することがらおよびことを口にすることはもつとも厳しい禁忌とされている。性器の部位、性交、抱擁など性行為を表すことば、愛人、姦通といった正式の夫婦以外の男女関係、さらに排泄についての表現がその禁忌に含まれる。また、女性は彼女の男性キョウグアイにたいして、太腿およびそこに施したイレズミを見せてはならず、使用していない腰布も目にふれさせてはならない。さらに、彼女は彼らの前でわいせつな歌を口ずさんではならない。^{*}

異性キョウグアイ間に規定されているそれらの禁忌を破ると、祖霊によってクラン成員に病氣や死などの災いもたらされると信じられている。また、女性が男キョウグアイにたいする規範を守らないと、彼らがカヌーでの航海中に災難に遭遇すると考えられている。このように行動規範を逸脱した場合に祖霊によって超自然的制裁があたえられるという信仰はリヤとよばれ、サタワルの人びとの日常的行動を律する基本となつている。リヤの観念は、子どもが原因

不明の病気になったり突然の死にいたった場合に、誰それが前述の禁忌を犯したからだとの説明づけにもちいられる。性に関する禁忌のうち、性器や性交行為を示すことばを異性キョウダイ間だけでなく、対人関係一般において使用することも慎まなければならぬ。とくに、相手の異性キョウダイに関連する性的ことがらを相手のいる場で口にすることはゆめしい事態を引き起こす。

私が調査中に経験した、性についての言語表現がもとで起きた紛争を紹介してみよう。

性表現と紛争

夕方の海岸で七人の男たちが輪になってヤシ酒を飲んでいる最中に、一人の若者が他の男にからんで「おまえの妹の陰核をなめろ」と口にした。すると相手の中年の男は側にあつた棒きれをつかみ、立ちあがつて若者を殴りつけたのである。周りの男たちは二人の中に入って制止しようとはせず、二人はとつくみ合いのけんかを始めた。二人は場所をカヌー小屋に移してお互いにナイフを持ち出し、性についての禁忌語をあびせあいながらにらみ合いを続けた。この騒ぎを聞いて多くの人がとが集まってきたが、彼らはただ見守るだけである。それからしばらく後に、禁忌語を口にした若者が属する克蘭の族長が腰布を三〇枚ほど集め、相手の男の克蘭の族長のもとに届け、二人の族長の命令でその喧嘩はおさまった。悪言を投げかけた男は、それ以後一年間ヤシ酒を作り飲むことが禁止されたばかりでなく、五〇米ドルの罰金を島の大首長に支払うよう命じられた。

他方、女性間においても彼女たちの男性キョウダイの性に関する悪言がもとで争いが起きる。女性は誰か（男性）が自分の兄弟の性的悪口を言ったということを耳にすると、かならずし返しをする。彼女は悪口をはいた男の女性キョウダイにたいして、その男の女性関係をあげたり、性的禁忌語をあびせるのである。つまり、女性は自分の男性キョウダイが性にからむ恥辱をうけた場合に、それを発言した男性の女性キョウダイにたいし性的禁忌語を投げ返すことによつて、自分の男性キョウダイの恥辱をはらすのである。

異性キョウダイの性に関する発言を忌むという習慣は、チューク社会にもみられる。そこでの日本の言語学者S氏の失敗談を紹介しよう。ミクロネシア語研究の第一人者であるS氏は店でフィルムを求めた。彼はフィルムが日本語からの借用語でトラック語で「フィルム」と発音することを知っていた。しかし、彼は女店員に「フィルムをください」と流暢なトラック語で話しかけてしまった。すると彼女は顔を真青にして店の奥へ逃げこんでしまった。マネージャーが現れ、「おまえは一体何てことを言う。彼女の兄弟でもいたら大変なことになる」とどなりつけたのである。S氏は友人にことの顛末を話し、「フィルム」はトラック語で「あなたの陰核」を意味することを知って肝を冷したのである。以後、S氏には「フィルム」というニックネームがつけられた。

S氏の場合は、あだ名をつけられただけで難を逃れたが、トラック社会では女性性器の名称を口にすることが原因で殺傷沙汰に発展することがある。

一人の男(X)が酔っぱらってシンセキの家に乱入した。イトコにあたる男(Y)が酒びたりの彼を叱責したために口論になった。平常心を失ったYは、酒飲みの男に「おまえの姉さんと性的行為をしろ」と罵った。ちょうどその家にXの姉がいたこともあって、激怒したXは持っていたナイフでYを刺し殺してしまったのである。この殺人事件は裁判所で裁かれることになった。日系ハワイ人の裁判長は、被害者(Y)の発言したことの意味と、それがトラックの慣習法においてどのように位置づけられるのかを理解するために、教育省言語局のスタッフに参考人として意見陳述を依頼した。

参考人に選ばれたスタッフはXとY双方のシンセキであり、自分の女性キョウダイをはじめ多くの親族が傍聴している前で、事件の状況や発言内容をありのまま陳述することにためらいを感じ一度は拒否した。しかし、彼は事件の場に同席していたことでもあり、裁判長の依頼を承諾したのである。被害者(Y)の発言の意味は、「小陰唇を吸え」というもので、慣習法では「犯せ」という禁忌語のつぎに「重い罪」になる。参考人の意見によるとトラックの男性はそのようなことを耳にすれば、発言した相手を殺害するのが「当然である」とのことである。この事件の場合、

争いの場に当事者の姉がいたということも重なって最悪の状況になったのである。男性間で相手の女性キョウダいの性に関することがらを口にするにはトラック語でフィー・フィー・ネー・マースとよばれ、「目の中に稲光をおこす」、つまり「目に電光を走らせる」という意味である。

性器変工による紛争解決

男性間で互いの女性キョウダイとの性的行為を連想させる発言は殺傷事件になるが、女性間でも彼女たちの男性キョウダイの「性的悪口」を言われた場合に、それに決着をつけるべき争いが起きる。この悪口とは男性キョウダイの性にまつわることをはくことである。たとえば、相手の女性の兄や弟が「愛人」をもっているとか、女に夢中になっているとか、「惚れ薬」を使っているなどである。女性は、自分の男性キョウダイの性的行動に関することを直接言った相手（女性）だけでなく、他者から間接に聞いた場合でも、発言した相手ないし相手（男性）の女性キョウダイに攻撃的態度をとる。その種のことを言われた女性は相手の女性にたいし、「おまえの小陰唇の花びらが小さいのによくそんなことを言えたものだ」と啖呵を切る。そして、二人はお互いに性的なことばで罵り合い、最後にはスカートをまくり上げて伸展変工した小陰唇のひだの大きさを比べあう。第三者の立ち会いのもとに、そのひだの性器外部への出具合で二者の勝ち負けを判定する。トラックの女性にとつては、彼女の男性キョウダイが性的侮辱をうけることはもつとも許せないことであり、彼らの名譽を回復させるためには自分の性器を露わにする行動をとるのである。ただし、前で述べたように、最近では小陰唇の伸展を美とする考えかたが衰微したため、この種の激しい論争は六〇歳以上の女性によってのみおこなわれている。

配偶者以外との性

サタワル社会においては、男女とも自分の配偶者とは別の異性と特定の期間に限り性関係をもつことが認められている。その異性とは、夫にとっては妻の女性キョウダイ、妻にとっては夫の男性キョウダイである。それらのキョウダイは、個人にとつて関係名称のうえでは配偶者と同じくプヌウの用語で指示される。配偶者の同性キョウダイとの性が許されるのは、自分の配偶者が長期間島を留守にするときである。島の男たちは現在でもカヌーで他島へ航海し、その島に数か月滞在する。その期間彼らの妻たちは夫の親の家へ移り、夫の姉妹夫婦や彼のクラン成員とともに生活する。彼女は夫の独身のキョウダイがいれば、そのうちの一人と性関係をもつことが許される。その場合、夫の実の兄弟が優先される。しかし、夫が帰島すればその関係は終結する。逆に、妻が他島にいるシンセキの病気見舞などで島を離れているあいだ、夫は妻の姉妹（独身）と性関係を結ぶことができる。

配偶者以外の異性との性関係を社会的に承認するそのような慣行とは別に、男性はほかの女性と「恋人」ないし「愛人」の約束をし、人目を盗んで性的行為におよぶ。この関係はアマレルとよばれ、男性にとつては愛人をもつことが「自慢」とさえなっている。愛人は他人の妻、寡婦そして未婚の女性である。とくに、男が他島へ航海に出ているあいだとか出稼ぎの期間に、その妻と一時的な愛人関係を結ぶ場合が多い。現在ではキリスト教によつて離婚が禁止されているが、四〇年前までは愛人関係から夫婦へと発展した例が数多くあった。その当時はまた、妻の出産で夫婦の性交が禁止されていた三年間は、夫は他の女性と性関係をもつことに積極的であった。

愛人関係は秘密裏に維持されるかぎり問題にはならない。しかし、愛人関係にある男女が性交現場を発見されたときには、当事者および彼らのクランは社会・経済的に大きな制裁をうけることになる。それは「他人の女を盗んだ」と表現され、「姦通」とみなされる。姦通が発覚すると男女のそれぞれのクランは、彼らの配偶者のクラン成員によ

つて多くの財産を没収ないし差し押えられる。男女が二人とも既婚者である場合の姦通は、経済的に悲惨な事態が生ずる。姦通した男のクランでは、彼の妻のクランと姦通した相手の夫の二つのクランから、生活用品、漁具、カヌーなどあらゆる動産類を「略奪」されるからである。クランの男性成員の姦通によって「被害」をうけた長老の経験では、差し押えられた大型カヌーは腰布を賠償に返却してもらったが、小型カヌー、漁具から衣類、斧、鍋にいたる一切のものを持ち去られたとのことである。その日からの料理も作れないので、持ち去ったクランに謝りにゆき鍋を一つだけ返してもらおう恥かしい目にあつたとも述べていた。

婚外性交が人びとの噂にのぼつたとしても、すべてが経済的制裁を受けるわけではない。この制裁をおこなうか否かは、相手が以前に財産を没収されたクラン成員であるとか、重婚的な婚外性交であるとかの場合にかぎられる。つまり、婚外性交は多くの男女がおこなうが、財産の略奪・没収へと発展する例は極めて少ない。

他島の男性にたいする性的歓待

キリスト教に改宗後、島内で積極的に愛人関係をもつ男性は少数になってきたといわれる。だがそれでも、他島の女性と比較的自由に性関係をもつ傾向は現在においても強い。サタワルの独身男性は、性を目的で他島へ航海するともいわれる。男たちはカヌーで他島を訪問したときに、その島の未婚女性と関係する。この島の男性と他島の女性との性関係が大らかであるということは、サタワルの「女性の貢献」の慣行からもうかがえる。サタワルの女性たちは、他島からカヌーで訪問してきた男たちに食料を提供し、性的サービスをする。

他島からカヌーで訪れた男たちが滞在しているあいだ、首長の指示のもとこの島の女たちは数組に分れ、カヌー小屋で寝起きしている客人（男）に毎日料理を届ける。女たちは片手にタロイモやパン果の食べもの、入った皿をもち、道中ひわいな歌を合唱しながら隊列を組み、ねり歩きながらカヌー小屋へ向う。そして、客人の一人ひとりに皿をさしだすときに、客人にたいし挑発的なしぐさをする。その挑発ぶりはつぎの歌詞からも知ることができる。

私たちは来るよ 私たちは来るよ

私たちがサタワルの女が来るよ
陰核を売りに 大きな小陰唇を集めて

私たちが来たよ

私はカヌー小屋の前へ行くだろう

私の可愛いAさんと会うだろう

私はあの男の口には腰をつかってやる

私は怒るようにひどく腰をふってやる

するともうあの男の口は淫らな臭がして

あの男のひげはボロボロと抜けるだろう

私はあの男の鼻にすりあげてすりさげて

淫らな臭をすりつけてやる^{*}

この歌は道中でも歌われ、女たちがカヌー小屋へ到着して一列になり、食べものを手渡すときにも合唱される。客人の一人ひとりの名前を歌いこみながら、歌詞に合わせて腰をくねらしたり、前後に動かししたり、股を広げて腰布を上下したり、性行為を連想させるしぐさをする。客人がその挑発にのって女の身体に手を触れたり、また腰布の下に手を差し入れたりすると、女たち数人がその



写真4 他島からの客や祝祭に披露される女性の踊り。

男をとり囲み、露わにした性器を男の顔に押しつける。その性的攻撃のあとで女たちはゲラゲラ笑う。これは女たちの挑発にのつた男が、「サタワルの女に辱かしめられた」ことを意味する。男にとつては「不名誉な行為」をしたことになり、評判をたてられるのである。だが、サタワルの男たちがその男の島へ行ったときに彼の女性キョウダイによってし返しされることになる。[★]

このような性的言動による客人の儀礼的歓迎とは別に、客人は訪れた島で女性と自由に性関係をもつことができる。それは客人の甲斐性にもよるが、とくに著名な航海者は女性の方から誘われる。こうした場合、客人と未婚の娘や寡婦との関係が発覚しても問題にならない。しかし、既婚女性との関係は慎重でなければならぬ。というのも、姦通とみなされ、乗って行ったカヌーを没収されたり、けんかざたになりかねないからである。

「女性の貢献」という慣行は、他島からの客人に食料を提供してもてなす行為であると同時に、サタワル社会において禁止されている女性の性的表現が公けの場で許容される機会でもある。前掲の歌詞の内容などは男性キョウダイだけでなく島の男性一般にも、日常生活の場で耳に入れてはならない性質のものである。けれども、他島の男性とのあいだでは何の規制もなく、自由にそして積極的に振まうことを女性に期待するのである。

おわりに

ミクロネシアの性文化の文脈のなかで、性と身体、性と社会関係について検討をくわえてきた。男女の性器の一部を切除したり、切開したりする、いわゆる割礼などの身体変工はアフリカ、オセアニア、アメリカ・インディアンなど多くの社会で見られる。それらは通過儀礼との関連でとらえられる傾向が強い。いっぽうで、男子の割礼に関しては、「象徴的去勢説」、[★]「子宮羨望説」、[★]「母子分離説」など、その解釈は多様である。女性の割礼についても、「男性性の喪失説」、[★]「性的欲望の抑制説」など、その存在理由についての説明も社会ごとに異なる。

本稿であつかったミクロネシアのカロリン社会の女性の身体変工は、性器（陰核、陰唇など）の一部を切除するの

ではなく、変形拡大するものであり、性行動を抑制するのではなく、高揚させる目的でおこなわれている。また、男性性器の包皮除去の習慣はなく、睾丸摘出をおこなう社会はあるが、その手術も性行動を促進させる性格が強い。このようにミクロネシアでは、身体変工が性的行動を奨励・促進する性文化と密接に関連している点に特徴があることをまず指摘できる。

つぎに、身体の性器の部位名称、性器を使用する行動に関する言語表現が、人びとの名誉、名声を辱かしの行動として位置づけられている点である。とくに、人間・社会関係の基本をなすキョウダイ間での性的言語表現がもつとも重視される。男性の場合には命をかけてまで、女性の場合は性器を露出させるという「恥ずべき」方法をとることにより、それぞれ異性キョウダイの辱かしめられた名誉を回復するのである。

割礼などの身体変工についての解釈や分析は、宗教的、心理的、通過儀礼的脈絡で進められてきた従来の研究から、性・セクシュアリティなど性文化との関連性についての研究アプローチへと転換することが今後の重要な課題である。

註文中★標示

- ★1—須藤健一、一九九三「社会人類学と性研究」須藤健一・杉島敬志編『性の民族誌』人文書院、一八〇—二〇頁。
- ★2—松岡静雄、一九二七『シクロネシア民族誌』岡書院、四三九—五〇〇頁。
- ★3—松岡、前掲書、三八〇頁。
- ★4—清水昭俊、一九九三「性の慣習と身体の価値分節」須藤健一・杉島敬志編『性の民族誌』人文書院、一四六—一四七頁。
- ★5—Gladwin, T. & Sarason, S. B., 1953, *Tribe: Man in Paradise*. Viking Fund Publication in Anthropology No.20, Wenner - Gren Foundation for Anthropological Research, New York, pp.106 - 107.
- ★6—須藤健一『母系社会の構造—サンゴ礁の島々の民族誌—』紀伊國屋書店、一九八九年
- ★7—一九三一年から七年間サタワル島に滞在した土方久功は、この慣行を観察し、その歌の卑猥さについて報告している。土方久功、一九九二『土方久功著作集7』三一書房、三七〇—三七三頁。
- ★8—女性が客人に対して料理を提供する慣行は現在でも継続しているが、集団的に性的挑発をする行為はキリスト教の受容後に廃止された。しかし、女性が性器を露出する行動はなくなつたものの、性的なことばで相手を罵倒することはおこなわれている。そして、男性キョウダイが性的な言葉で揶揄された島の男がサタ

ワルに来た時に、サタワルの女性がその男にし返しをすることもおこなわれている。

- ★9—石川登、一九八七「男子割礼をめぐる諸解釈」宮田登・松園万亀雄編『文化人類学、4—性と文化表彰』アカデミア出版会、一五四—一六九頁。